

町小だより

令和5年
7月6日
No. 676
御免町小学校

水やり

校長 相澤 祐助

朝、児童玄関前に立っているいろんな光景が目飛び込んできます。じゃんけんをしようとチャレンジしてくる子、大きな声であいさつをしてくれる子、ちょっと恥ずかしそうに会釈をする子、お家の人と一緒に登校する子、様々です。微笑ましいのが、雨の中、学年で栽培しているヘチマにじょうろや霧吹きで水をあげている子でした。思わず、ニコリしてしまいます。その様子を見ながら去年、私の父が言っていた話を思い出しました。

「ここ何年も、日本中のあちこちで洪水が起こっていて大変だ。この間の村上地域の大洪水には言葉もねかった。作物も家も、みんな流されてしもた。そうかと思うと、ずっと晴れが続いて雨が降らねこともある。差が激しいんだわ。暑い夏の水やりは大変だろ、秋になると水やりはあまりしなくてもよくなる。隣の〇〇さんは、秋らてがに毎日、一日中、スプリンクラーで水をやってたろ、あれでは作物は育たねてば。」

「どうして？水やりすればいいんじゃない？秋でも晴れれば暑いし、作物は枯れてしまふんじゃない？」私は父に食い下がりました。

「違うんだ。水やりは季節によってやり方を考えねばならねんだ。暑い夏は、朝や夕にたっぷりと水を注ぐんだわ。苗に当てないように、根元にたっぷりと。秋になると寒暖差が激しくなって、朝や夕には霜が降る。秋の苗にはそれで十分なんだわ。むしろ水をやり過ぎると、根が伸びない。水をやり過ぎないことで、根は地下深くに伸びるんだわ。そして、丈夫な苗に育ち、茎や葉がしっかりと育つ。多少の風が吹いても倒れねんさ。そうやって、立派な白菜、大根になる。水のやり方、タイミングを間違えると作物は育たねて」

この話を聞きながら、自分の子育て、学級担任をしていた頃の自分を思い出していました。子どもの成長のためにとって、自分が出過ぎてしまっただけではなかったか、転ばぬ先の杖を渡して子どもの成長を阻害してなかったか、と。子どもは自分で成長する力を持っています。自分の力で根を伸ばし、強く、たくましくなっていくのです。畑の苗のように。

80歳を過ぎた私の父母は今も健在で、二人で家の裏の畑で、夏は枝豆、ナス、きゅうり、ジャガイモを育てています。秋から冬にかけては、白菜や大根を育て、私たち夫婦や孫、近所の皆さんに食べてもらうのが生きがいのようです。

先日、出張の帰り、学校花壇をのぞいてみると、6年生が、自分たちだけで花に水をあげていました。夕方、仲間と自主的にたっぷりと。先生から「水やりをして」とお願いされたものではありません。また、朝、授業の前に、学校花壇の草取りをする5年生もいます。自らの思いで。町小の子どもたちは自分で考えて行動しています。